

函館市観光基本計画

Hakodate Tourism Strategy

2004-2013

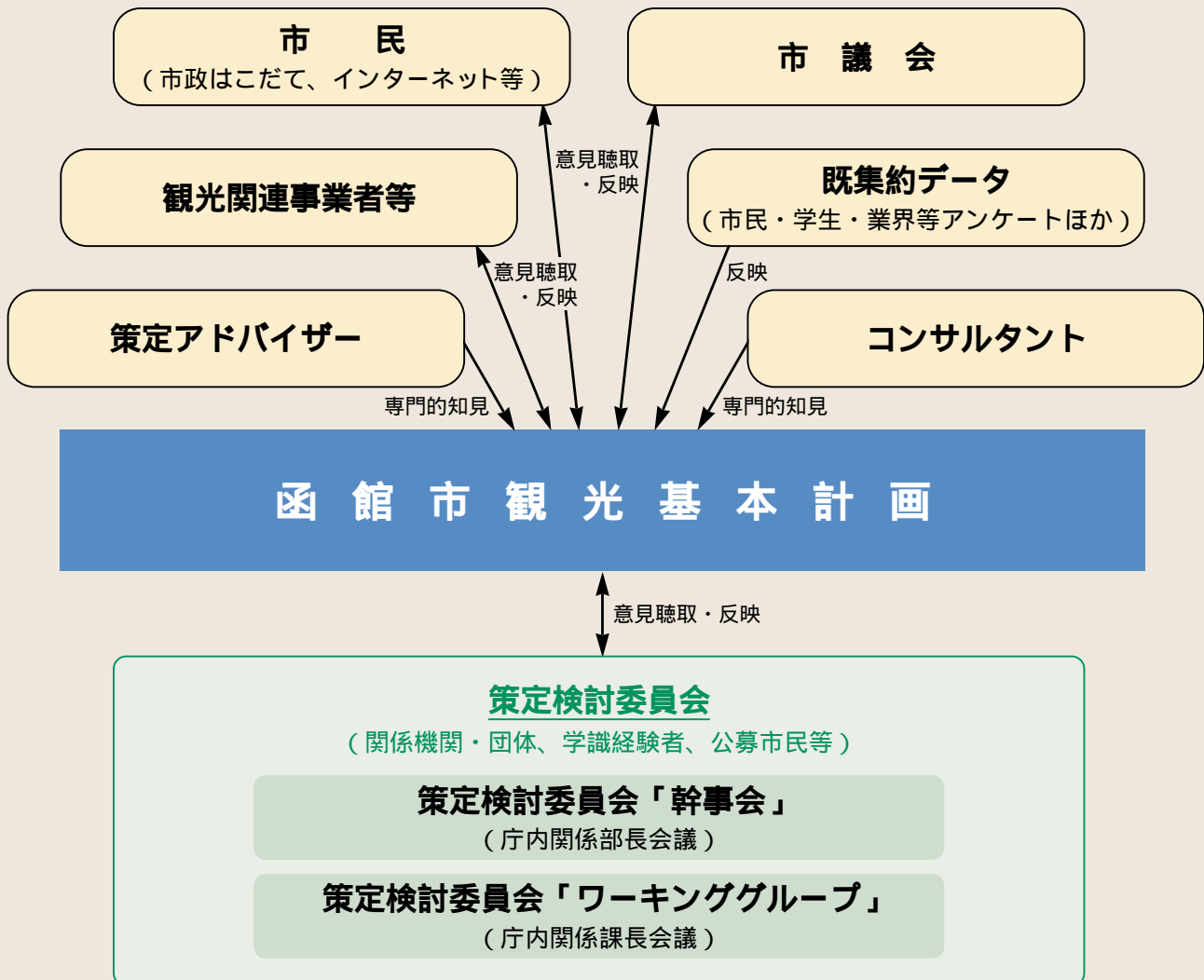
参考資料

- 1 計画策定までの経過.....130
- 2 函館市観光基本計画策定検討委員会.....131

1 計画策定までの経緯（平成16年5月現在）

- 平成13年11月** 観光基本計画策定に係る市民アンケートを実施
- 平成14年1月** 観光基本計画策定に係る市内業界関係者・市内学生・全国旅行代理店アンケートを実施
- 平成15年7月** 北海道大学大学院 越澤明教授（都市環境工学）を函館市観光基本計画策定アドバイザーとして依頼
- 8月** 函館市観光基本計画策定検討委員会を設置
（16年3月までに全体会議を3回、専門部会を6回、幹事会（庁内関係部長会議）を2回、ワーキンググループ会議（庁内関係課長会議）を2回開催）
- 8月** 策定調査業務の一部を社団法人日本観光協会に委託
- 12月** 函館市観光基本計画策定検討委員会から、中間報告策定に係る意見書を受領
- 平成16年1月** 「函館市観光基本計画（中間報告）」を公表
- 3月** 函館市観光基本計画策定検討委員会から、素案策定に係る意見書を受領
- 5月** 「函館市観光基本計画（素案）」を公表
- 6月** 函館市観光基本計画策定検討委員会から、素案に関する意見書を受領

計画策定の手法（体制図）



2 函館市観光基本計画策定検討委員会（平成16年3月現在）

1 開催経過

平成15年	8月29日	第1回全体会議開催
	9月9日	第1回魅力部会開催
	9月10日	第1回まちづくり部会開催
	9月24日	第2回魅力部会開催
	9月25日	第2回まちづくり部会開催
	10月07日	第2回全体会議開催
	11月20～28日	第3回魅力部会開催（持ち回り部会）
	11月20～28日	第3回まちづくり部会開催（持ち回り部会）
	12月2日	第3回全体会議開催 （「中間報告策定に向けた意見書」の内容確定～市長あて提出）
	12月16日	第1回ワーキンググループ会議開催
	12月25日	第1回幹事会開催
平成16年	2月4日	第4回魅力部会開催
	2月5日	第4回まちづくり部会開催
	2月25日	第5回魅力部会開催
	2月26～3月5日	第5回まちづくり部会開催（持ち回り部会）
	3月10日	第4回全体会議開催 （「素案策定に向けた意見書」の内容確定～市長あて提出）
	3月23日	第2回ワーキンググループ会議開催
	3月24日	第2回幹事会開催
	6月30日	第5回全体会議開催 （「素案に関する意見書」の内容確定～市長あて提出）

2 委員名簿

（市指定委員）

番匠 勲	函館工業高等専門学校 名誉教授	（まち）
木村 健一	公立はこだて未来大学 助教授	（魅力）
嵯峨 直恆	北海道大学大学院水産科学研究科 教授	（まち）
根本 直樹	北海道教育大学教育学部函館校 助教授	（まち）
渡辺 保史	岩手大学・徳島大学 非常勤講師	（魅力）

（団体推薦委員）

松木 志津香	函館商工会議所青年部	（まち）
高瀬 勝彦	（社）函館青年会議所 理事長	（まち）
内村 正	（社）函館国際観光コンベンション協会 専務理事	（まち）
折谷 泉	函館21の会 代表	（まち）
有田 幸司	（社）函館市身体障害者福祉連合会 専務理事	（まち）
二本柳 慶一	函館市西部地域振興協議会 会長	（まち）
星野 裕	函館未来構想研究会 幹事	（魅力）
河内 孝夫	函館湯の川温泉旅館協同組合 理事長	（魅力）
石黒 義男	函館物産協会 会長	（魅力）
土田 文広	（株）ジェイティービー函館支店 支店長	（魅力）
森崎 義和	函館地区バス協会 副会長	（魅力）
丸藤 競	活力ユニット 代表	（魅力）
鎌鹿 隆美	函館自然観察会 事務局長	（魅力）
橋田 静子	新函館農業協同組合 理事	（魅力）

（一般公募委員）

秋田 文奈	（まち）
枝松 和子	（魅力）

（ ）内は所属部会名
 観光 = 「まちづくり」部会
 魅力 = 観光の「魅力開発」部会
 = 委員長 = 部会長
 （敬称略）

3 函館市観光基本計画策定検討委員会設置要綱

(設置)

第1条 函館市観光基本計画(以下「計画」という。)の策定にあたり、関係機関、学識経験者、市民等の意見の反映と計画の検討に資するため、函館市観光基本計画策定検討委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(組織)

第2条 委員会は、広く観光に関連する分野に属する各種団体から推薦された者14人、観光に関心のある市民で公募に応じた者2人、および市が指定する者5人の計21人をもって組織する。

(任期)

第3条 委員の任期は、計画の策定までとする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員会)

第4条 委員会は、市長が招集する。

2 委員会に委員長を置く。

3 委員長は、会議の進行と調整を行う。

4 市長は、必要に応じて委員会に専門部会を置くことができる。

(幹事)

第5条 委員会に幹事を置く。

2 幹事は、次頁に掲げる職にある者をもって充てる。

3 幹事は、委員を補佐し、計画の策定に関し必要な事項について調査検討する。

(意見の聴取)

第6条 委員会は、計画の策定の検討に関し、必要があると認めるときは、関係者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(庶務)

第7条 会議の庶務は、商工観光部観光振興室観光課において処理する。

(その他)

第8条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営について必要な事項は、その都度協議して定める。

附 則

この要綱は、平成15年8月29日から施行する。

次頁(第5条関連)

函館市観光基本計画策定検討委員会幹事会幹事

企画部長、市町村合併協議会事務局長、市民部長、福祉部長、環境部長、農林水産部長、土木部長、都市建設部長、港湾空港部長、函館駅周辺整備事務局長、教育委員会生涯学習部長、財団法人函館市住宅都市施設公社常務理事、商工観光部長

函館市観光基本計画策定検討委員会ワーキンググループ設置要綱

(目的)

第1条 函館市観光基本計画策定検討委員会設置要綱第5条に規定する幹事を補佐するため、函館市観光基本計画策定検討委員会ワーキンググループ(以下「ワーキンググループ」という。)を設置する。

(組織)

第2条 ワーキンググループは、別紙第1に掲げる職にある者をもって組織することとし、座長および委員をもって構成する。

(会議)

第3条 ワーキンググループの会議は、座長が招集し、座長がその議長となる。

(庶務)

第4条 ワーキンググループの庶務は、商工観光部観光課において処理する。

附 則

この要綱は、平成15年12月16日から施行する。

別紙第1(第2条関係)

函館市観光基本計画策定検討委員会ワーキンググループ委員

企画部	企画管理課長、計画調整課長
市町村合併協議会事務局	総務課長
市民部	市民課長
福祉部	福祉推進課長
環境部	管理課長
農林水産部	水産課長、農林課長
土木部	緑化推進課長
都市建設部	街づくり推進課長
港湾空港部	管理課長
函館駅周辺整備事務局	計画調整課長
教育委員会生涯学習部	管理課長
財)函館市住宅都市施設公社	花と緑の課長
商工観光部	観光課長

中間報告策定に向けた意見

1) 基本理念の設定に向けて

1. これまでは「観光資源の発掘（第一期）」、「観光の産業化（第二期）」、今後の10年は「観光文化のまちづくり（第三期）」を目指すべき

今回の計画は「観光文化のまちづくり」という位置づけも必要。そのためには、既存の観光資源を「生活資源」、「教育資源」、「産業資源」の枠組みで再編集すべき

2. 開発重視から「持続可能な観光」への変革を図り、観光客・市民双方の満足度を高めるべき
サービスや資源、施設の再構築にあたっては、観光客個人が何を体験し、何を体験したいのかという視点で捉えていくべき（ユーザー中心型のアプローチを考へていくことが重要）
今後の持続的な観光産業の発展を期するため観光客の体験の質をどれだけ高められるかという方向性で施策展開すべき

現計画を自己評価の視点で総括し、その修正や発案による新たな戦略を構築すべき

ハード重点政策から新しい「街の魅力」を発見し、かつ効果的に発信するという「コンテンツ」重視への転換

3. わが国有数の国際観光都市「函館」を全市民が認識し、プライドを持つべき

函館が、わが国有数の観光地であるということを再認識し、個々の観光資源に磨きをかけていくべき

函館が観光都市だという認識を全市民が持てるよう啓発すべき

基本計画には「函館国際水産・海洋都市構想」に掲げる各事項の実現についても、盛り込むべき

サハリン開発に関連し、アメリカやヨーロッパとの交流が盛んになっている背景を踏まえ、サハリンとの国際線を有する地の利を生かした「国際戦略」についても、計画では言及すべき

4. 「ホンモノ」、「ベスト」、「ナンバーワン」、「オンリーワン」を目指すべき

「函館独自」といわれるオリジナリティあふれる観光地づくりを推進すべき

函館は良い意味で、他にない確立された「ブランド志向」を目指すべき

観光地間競争を勝ち抜いていくため、「ホンモノ」、「ベスト」、「ナンバーワン」という視点で、地域の個性や多様性を最大限引き出すべき

北海道は食などに代表されるように、それだけでブランド力があるので、それをさらに強めていけるような取り組みを展開すべきであり、函館、道南のブランド力は何か？という視点での資源の掘り起こしを図るべき

函館のブランドは何か？ということを再検討し、それを強力に打ち出していくべき

5. 市民主体で「まちの演出」、「魅力の発見」に取り組み、情報発信すべき

市民主体で知られざるまちの魅力を発掘し、自らが情報発信していくべき

古いものをそのまま見せても観光客は納得しないという現実を踏まえ、古いものに対してどう保存活用し、どう付加価値をつけていくかということ、観光という観点から再編集、再構築すべき

全市民が観光ガイドになれるような仕組みや啓発活動を検討すべき

まちの個性や魅力を的確に伝えることができる質の高いガイドを育成すべき

生活資源を美しく飾ることにより、観光資源の充実にもつながる

まちの景観を創り上げる際には、「そこで何かをやってみよう」と思えるような美しいデザインを追求し、仕上げていくことも考えるべき

市民主体で発見した函館の「良いもの」については、単なる発見にとどまらず、発信力のある人に発信してもらうべき

6. 今ある観光資源や情報を再編集し、磨き（ブラッシュアップ）をかけるべき

既存施設や資源・情報などを再構築し、産業遺産や自然環境などをテーマとしたエコミュージアムを創造すべき

住民自らの手で地域の資源を再評価し、発信していく「地域学」を導入し、産業資源化できるものを発見してビジネスにつなげていくべき

むやみに新たな観光資源を開発するのではなく、既にある資源を再評価し、再編集していくべき

新たなテーマパークを造るのではなく、「自然と文化遺産のテーマパーク」であるまちそのものをブラッシュアップする方向性で取り組むべき

函館にある潜在資源の魅力を伝えるため、みせる工夫や環境整備を行うべき

観光都市函館は、「世界中の人から見られている」という認識に立って、住む者にはわからない「へんなもの」、「格好のわるいもの」に気づき、改善していくべき

大門商店街など、普通に生活感のある普通の町並みや地元に着した情報をPRしていくことも必要。市民がまちの魅力を理解し魅力を伝えていくべき

7. 未だ潜在している観光資源を掘り起こすべき

北海道は食などに代表されるように、それだけでブランド力があるので、それをさらに強めていけるような取り組みを展開すべきであり、函館、道南のブランド力は何か？という視点での資源の掘り起こしを図るべき

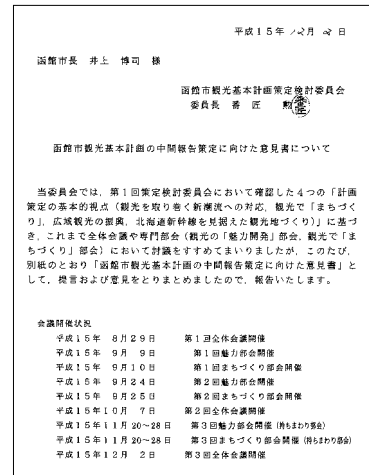
8. 観光振興の方向性を明確に示し、民間観光投資の誘発を期すべき

行政は、今後の観光振興の方向性を示し、街づくりの美観、景観、道路など関連インフラを整備する。民間事業者は、それに基づき創意工夫してビジネスを展開するといった的確な役割分担のもと観光振興を図るべき

企業、事業者の函館への投資を喚起するため、観光振興やインフラ整備の考え方を明確に示すべき

民間の自由自在なビジネス展開を誘発するため、行政はインフラ整備の内容を投資促進の「担保」として明確に示すべき

観光施設整備の「投資対象」としての魅力売り込むため、いわゆる「シティセールス」を展開すべき



9. 「マス（団体）」、「カスタム（個人）」双方のニーズに対応できるシステムやツールを産み出すべき

古いまま、そのままのものが良いというイメージは分かるが、現実的には、多くの方は普通の生活にはない異なるものを求めて観光するので、530万人のニーズと、少人数のニーズを棲み分けて討議すべき
 現状で潜在しているニーズと、大多数の満足を得るニーズを区分し、併行して検討すべき
 必要最低限の情報だけを提供し、残りは自分で発見させるという視点も必要ではないか
 サービスも、サービスがあった方が良いというニーズもあれば、自分で発見してというニーズもあるという状況なので、どちらか一方にシフトするという問題ではなく、どちらも満足させる方向性で取り組むべき
 「マス」、「カスタム」双方のニーズに対応できるという視点が大切ではないか
 多様な観光形態への対応として木村委員提言の「高精度のマップ」などは重要な役割を果たすと思われる。最大公約数的に情報を確認しあい、その成果は使う人に委ねるといった発想で、作成に取り組むべき

2) 目標の設定に向けて

1. 「量」的目標（観光入込客数）のみならず、顧客満足度向上の観点から「質」的目標も掲げるべき

函館の現在の観光を（特に質の面から）きちんと評価し、今後の施策の効果を測定するスタートラインとする。質の達成水準にも数値目標が必要
 資金計画まで踏み込んだ「事業計画」の発想。民間の事業者の投資意欲を活性化させるような方策も検討の必要あり
 数値目標などを定め、それに向かって資源を適切に配分していくべき
 「質」の評価も含め、顧客満足度を上げるためのメルクマール（指標）を設けるべき
 目標設定にあたっては、実現可能な事項ばかり並べてもインパクトがないので、「チャレンジ」の要素も加味すべき
 外国人観光客の誘致目標を別途掲げ、その数値を戦略として活用すべき
 計画推進にあたっては、ローリングシステムによる運用も検討すべき

3) 計画の推進に向けて

1. 市民・企業・行政の役割分担を明確にし、三者協働のもと柔軟に計画推進（チェック＆フォローアップ）していく仕組みを構築すべき

本策定委員会自体が発展的に再編成をして、計画の推進段階にも積極的に関与していくべき
 進捗状況のチェックには積極的な第三者（外部）評価を求める
 社会情勢の変化に対応していくため外部評価のシステムを確立し、計画の柔軟な推進を期するべき
 市民・業界・行政が一体となって計画の実現に向けた努力を行うのはもちろん、行政内部も、部局の垣根を越えて有機的に連携をとりながら推進すべき
 計画策定後も、定期的に進捗状況をチェックするような体制を確立すべき
 誘致強化に向けて、観光客、市民双方の利用率向上に向けた公設検討組織を設置するとともに、官民業が連携して計画をフォローアップしていくべき
 計画推進にあたっては、外部評価や進捗状況をチェック（中間段階での施策の見直しを含め）する第三者的な評価のシステムを構築すべき
 自分達の立案したものは、自分達で執行するという姿勢で、策定検討委員会のメンバーが主体となって「立案・執行・自己管理」に取り組むべき
 各施策については、事業主体と「短・中・長期」など実施時期を明確化すべき

2. 施策のロードマップを明確に示し、優先順位を明らかにすべき

計画に掲げる各施策のロードマップを作成し、実施項目に優先順位をつけて確実に実行していくべき
 施策展開にあたっては、事業の将来性を考慮し、実施主体の官民棲み分けや資金面も含めて考慮すべき

3. 市民・企業・行政の有機的連携を促す組織を設立すべき

NPOなど市民レベルの推進母体を中心に行政、産業、学校の協働のスタイルを作り上げることが必要
 エージェントからの企画外のニーズにも対応するため、各種団体のスムーズな連携が図られるシステムを構築すべき

4. クレームをプラスに転換できる仕組みを構築すべき

函館観光の改善点と、その優先順位を明確にするため、クレームを集約し整理すべき
 クレームを集約し、ナマの声をバックデータとして、改善点を明らかにすべき
 クレームの内容とその対処結果などを積極的に公表すべき
 観光客からの苦情などを情報公開し、謙虚に耳をかたむけるべき

4) 施策の基本方向の設定および具体的施策の抽出に向けて

1. 旅行形態の多様化に対応できる魅力づくりを

ア / 団体旅行・個人旅行の双方に対応できるシステムを構築すべき

再掲：エージェントからの企画外のニーズにも対応するため、各種団体のスムーズな連携が図られるシステムを構築すべき

イ / 団体旅行・個人旅行の双方に対応できるツールを創造すべき

「マストツーリズム」を次のリピーターに繋げる魅力づくりのため、高精度のマップやガイドを作成し、自分達で「探す」楽しみ（一味違う魅力）を提供すべき
 地元ならではのといった情報を的確に把握し、隠れた魅力を提供すべき
 他の団体旅行とは一味違うメニューを提供しなければ観光客には届かないので、それを届けるためにどうするかといったことを検討すべき
 マストツアーへの魅力提供のため、同じツアーで行っても「自分達の団体だけ」というものを提供すべき
 「マストツーリズム」にどのような魅力を付け加えていくか、それを個人旅行へのリピーターにいかにつけ付けていくか、そのための仕掛け作り・見せ方を検討すべき

2. 市民のホスピタリティ意識の向上を

ア/ホスピタリティを「教育」すべき

リピーターを増加させるうえでは、人的サービスの充実が鍵。市民ぐるみでの「おもてなしの心」醸成に向けて、観光都市らしい独自のホスピタリティ教育を展開すべき

函館が観光地として生き残るためには、子供の頃から郷土愛を育むような教育が必要。行政だけでなく、市民が一丸となった取組を行うべき

観光都市の資質向上に向けて、接遇・観光・商道德教育を実施すべき

観光客の受け入れ強化のため、顧客満足主義を徹底すべき

函館ならではの観光学科を設立すべき

一番大切なのは「人づくり」なので、具体的な人づくりの施策を盛り込むべき

まちづくりには「人づくり」が欠かせない。次代のまちを担う人材の育成を図るべき

自分の住むまちに誇りがもてるような「道徳教育」を行うべき

何かをしてあげるといことは「サービス」であって、ホスピタリティは「あたたかく迎えてあげるといこと。まちのすばらしさを認識させることこそが、ホスピタリティにつながる要素となるので、子供の頃から郷土愛を育む教育が必要である

イ/ホスピタリティ意識を自発醸成させる環境を創出すべき

市民以外の人から見ると新鮮に映るものが、函館には多く潜在しているので、その情報を市民参加で発見し編集し発信できるような取組を検討すべき

ホスピタリティ向上には、地元人の誰もが観光ガイドになれるような環境づくりが重要。地元の人が地元のことを十分に理解できる仕組みを検討すべき

多様な活動を展開している個々の団体の取組を把握し、それをつなげていくべき

さらなる観光振興に向けて、「気づく」、「つなげる」、「動かす」を連動させて取り組むべき

ウ/ホスピタリティを誘致戦略として活用すべき

函館観光の持続的な発展に向けて、将来のリピーター層として有望な修学旅行生への適切なアプローチ（おもてなし、歴史や文化を「見せる」工夫など）を展開すべき

3.市民も楽しめる観光地づくりを

ア/観光客と市民の交流空間を創出すべき

観光客と市民との交流を促す仕組み（イベント、場所の創出）を構築すべき

観光客や市民が自由に活用できる「歩行者天国」を創出すべき

まちのなかに、市民と観光客が集い、待ち合わせができるようなシンボル空間を創出すべき

イ/市民生活を豊かにする観光資源の充実を期すべき

観光客のみならず、市民も「観光地函館」が楽しめるという視点も必要。そのためには、交通アクセスの充実（電車・バスの夜間運行など）を期すべき

いわゆる「観光客向け」の施設ではなく、地元の人間に利用され、親しまれる施設となるよう、観光事業者は努力すべき

市内には数多くの温泉資源があるので、温泉をテーマとした博物館や科学館などをつくり、子供たちの学習の場とすべき

多くの若者は「若者が遊べる場が少ない」との認識であり、水族館や遊園地、科学館などの整備を検討すべき

水族館など誘客系の施設については、規模の小さい中途半端なものは成功しない

若者が集えるようなデートスポットを演出すべき

若者向けの商業施設の誘致を検討すべき

市民のなかにも体験型観光を望む声があるので、そうした視点からも検討すべき

小規模なイベントが数多く展開されているが、「函館ならではの」、「函館を代表する」といったイベントが未だ成熟していない。観光客向けのイベントではなく、ねぶたのように、「自分たちが楽しむ祭り」を創出すべき

体験学習がますます重要視されつつあるなか、函館ならではの「海」をテーマとした素材が活用しきれていない。市民自らが海の魅力を再認識し、観光客にその楽しさを伝えることができるようなもの、例えばベイエリア発着のいかつり、ヨット、クルーザー体験などの充実が望まれる

観光客増による交通渋滞などは、市民生活にとってはマイナスであり、そうした面からも交通インフラの整備を推進すべき

ウ/バリアフリー対応の充実を期すべき

障害者が観光しやすい環境づくりとして、施設のバリアフリー化を進めるべき。バリアフリー化が叶わない場所では、人の手によるアシストがなされるよう、その体制を構築すべき

ユニバーサルデザインは、基本的にはバリアフリーのために景観を崩すものではなく、健常者でなければ行けない場所があったら、NPOなどがサポートするといった仕組みなどで対応すべき

高性能のマップに、バリアフリー関連情報を踏み込んで盛り込むことも必要である

エ/地域の原風景や財産を美しく磨くべき

函館山は市民共有の財産であり、とりわけ明治期に築造された函館要塞は優れた歴史遺産である。地域の資源として積極的に保全活用すべき

函館海岸に散策路を整備すべき

住吉町から湯の川までの函館海岸の砂浜化を促進すべき（ベニスビーチからサンタモニカにかけての美しい景観と近似した風景が創出されるはず）。また、その際には海浜空間を利用した新たな交通インフラ（江ノ電のような）の展開についても検討すべき

再掲：生活資源を美しく飾ることにより、観光資源の充実にもつながる

再掲：函館も、マチの景観を創り上げるときには、「そこで何かをやってみよう」と思えるような美しいデザインを追求し、仕上げていくことも考えるべき

4.体験型観光メニューの充実を

ア/地域性を生かしたオリジナリティあふれる体験型観光メニューを開発すべき

農業観光については、全国各地でも展開されており、目新しいものではなくなりつつある。農村活性化を図るうえからも、オリジナリ

ティあふれる農業体験観光メニューを開発し、その積極的なPRに努めるべき
 映画のロケ地、ゆかりの場所などが即地的にわかるよう、何らかの表示しておくべき
 湯の川漁港の完成後は、早朝の昆布採りや鮭の収穫などの海上見学ツアーを創出すべき
 啄木小公園に詩情を付加するため、砂浜整備と蟹の放流などを検討すべき
 修学旅行体験観光の充実を期するため、水産学部や未来大、高専などの見学なども新展開すべきではないか
 グレイをテーマとした観光客誘致も効果的なので、さらにPRすべき
 多種、多様な観光ニーズに対応するため、多彩なオプショナルツアーを確立すべき
 広域観光振興の鍵は体験要素である。海との関わりなどを生かした修学旅行の体験メニューともなるものを立案すべき

イノ市民「が」楽しめる体験メニューを創出すべき

再掲：市民のなかにも体験型観光を望む声があるので、そうした視点からも検討すべき
 再掲：体験学習がますます重要視されつつあるなか、函館ならではの「海」をテーマとした素材が活用しきれていない。市民自らが海の魅力を再認識し、観光客にその楽しさを伝えることができるようなもの、例えばベイエリア発着のいかつり、ヨット、クルーザー体験などの充実が望まれる
 修学旅行対応の体験観光プログラムは充実しているが、一般向けのものは少ないので、地元との「ふれあい」などをテーマとした一般向け体験観光の充実を期すべき

ウノ体験型観光の起業を促進すべき

観光客はいわゆる「地のモノ」を求めている。地域のコメ、地域の野菜、地域の特産品を売り物にしたレストランなどを増やすべき
 海の体験学習分野の充実にあたっては、単に体験学習の充実という面にとどまらず、「産業化」という視点も重要である

エノ体験型観光をマネジメントする組織を創設すべき

体験型観光については、新規メニューの創出、PRや個々の事業者間ネットワークづくりを行う民間組織を（行政の初期支援を前提に）立ち上げるべき

体験型観光・体験型メニューの充実を期するため、草の根レベルの情報を集約すべき

オノ有望客層を満足させる質の高い体験メニューを開発すべき

高齢者には、地元特有の食材や伝統的な食の文化などを提供できれば喜ばれる。富裕層である高齢者にはいかにお金を消費してもらおうかといった視点での取り組みを検討すべき
 有望客層である「団塊の世代」が高齢者層となったときには、消費行動に多大の影響を及ぼすといわれていることから、そこに訴求する効果的な対応を検討すべき

5. 滞在型観光の振興を

アノ滞在を「サポート」する仕組みを構築すべき

リゾート客や研究者などの長期滞在を促し、観光振興に結びつける施策を検討すべき
 長期滞在型の観光を促進するため、西部地区の遊休不動産の有効活用（コンドミニウム化）を検討すべき
 遊休マンションを長期滞在客に貸し出すための管理会社が必要である
 研究者が夏休みを利用して一か月程度家族と滞在し、バカンスを楽しみながら研究もしていくような、そんな形態が実現できる環境面での整備として、民間主体で賃貸の研究室や長期滞在型の寮が整備されてしかるべきである

イノ滞在を「要する」仕組みを構築すべき

アーティスト イン レジデンス（アーティストに宿舎と創作の場と作品発表の場となる施設を提供、ある期間そこに滞在させて創作活動を支援する）やサマーセミナーなどを通じた市民の学習機会の増大を図るべき
 高齢者、障害者の旅行を促進するため、「健康」と「温泉」をテーマとした滞在型の観光地づくりを進めるべき
 長期滞在型の観光行動を促すため、健康をテーマとしたカリキュラムを創出すべき
 観光日程の延伸にはナイトレジャーの充実が効果的。貸衣装（正装）を用意して摩周丸で音楽会を楽しむことなど、有望客層（50代男女）の満足度と観光消費を促すための仕組みを構築すべき

6. 観光土産品の充実を

アノ高品質でオンリーワンの土産品を開発すべき

観光振興を期するうえで、観光土産品の果たす役割は大きい。朝市での一部業者による粗悪品トラブルなどは函館観光全体の否定にも繋がってしまうので、どの店、どの場面でも「良いもの」のみを提供すべき
 地元の人に「認められる」観光土産品づくりを進めていくべき
 土産品店の品揃えはどこも同じなので、オリジナリティのある土産品を創出すべき
 函館を代表する観光土産品が確立されていない。地域の素材を生かした函館ならではのナンバーワンといえる土産品を創出すべき
 市内の土産品売り場は、どこの観光地にもあるような品揃えである。函館ならではの土産品を創出し、販売すべき

イノ地域の漁・農資源を活用した「地産地消」を促進すべき

函館の土産物店には、市外の土産品が数多く販売されているが、極端に言えば、現地のものは現地でしか販売しないという「地産地消」の意識を広めることも検討すべき
 地元の産物は観光客に喜ばれるので、漁業や農業が身近にあるという環境を生かし、それらが簡単に確保できるようなシステムを構築すべき（市民一体の観光地づくりに繋がる）

7. 観光客受け入れ態勢の充実を

アノ受け入れ施設を整備すべき

函館山の雨天・霧対策のため、その代替機能としてインドアタイプの観光資源や新たなサービスを構築すべき
 函館山の雨天・霧対策のため、駅前に展望タワーなどを設けるべき
 観光案内板については、国際観光都市を目指すうえで韓国語、台湾語の併記も検討すべき
 観光情報とあわせ、イベント情報やチケット購入が1カ所済むような施設（観光案内所に隣接してチケット売り場を設けるなど）を検討すべき
 西部地区の駐車場不足が顕著なので、何らかの対策が必要ではないか

観光施設間の交通手段に関する表示が少ないので、充実を期すべき

ローブウェイ山麓駅はアクセスに難があるので、緑の島に移設すべきではないか

水族館に関しては、緑の島の周囲に人工池を配したり、港内にガラスの生けすを造れば、安価で良いものができるのではないか

再掲：水族館など誘客系の施設については、規模の小さい中途半端なものは成功しない

再掲：障害者が観光しやすい環境づくりとして、施設のバリアフリー化を進めるべき。バリアフリー化が叶わない場所では、人の手によるアシストがなされるよう、その体制を構築すべき

函館山の荒天時の対処法を確立することが最大の課題であり、早急に検討すべき

イ / 受け入れツールを充実すべき

「標準」、「共有」、「無料配布」をキーワードとする超高品質の地図を作製し、それを社会資本（情報インフラ）として活用すべき

観光施設が連携する割引カード制度を構築すべき

ウ / 受け入れ体制を構築すべき

函館山の雨天・霧対策のため、その代替メニューを確立しておくべき

戦略的に地域情報を発信していくため、FCなどの体制構築を図るほか、ドラマや旅番組などに有用な情報提供ができる広報体制を構築すべき

料理、接客、情報提供などの分野に、函館ならではの視点を据えた評価システム（ミシュラン）を導入すべき

新たな旅行ニーズに対応するため、観光施設の料金体系の見直しも含めた連携策を検討すべき

多様なニーズに対応できるよう、サービスの細やかな管理を実施すべき

観光客託児所システムなど観光時における受け入れ体制を充実させ、他にない観光「しやすい」サービスを展開すべき

外国人観光客へのサービス向上のため、外貨が使用できる店などを、システムとして確立すべき

高齢者、障害者の観光をフルサポート（昇降手助、移動、案内）する業態を確立すべき

函館山山頂展望台の夜景シアターは、無料開放すべき

駐車場や観光施設の受益者負担について、無料化も含め検討すべき

有償ボランティアの育成・認証制度を構築すべき

市電と観光駐車場を組み合わせたパークアンドライドを構築すべき

個人型観光への対応策として、「地域の語り部」的な存在も必要であり、そうした人的資源を活用できるNPOのような組織を確立すべき

市民の外国語習得を促進するとともに、要望に応じてガイドできるシステムを確立すべき

観光客が安心して観光できる「安全」なまちを確立すべき

イギリスでは街のいたるところに案内所が点在しており、小さな店の情報までが網羅されているが、そうした受け入れ体制の充実を図るべき

8. 広域観光の振興を

ア / 世界に誇る広域観光ゾーンを形成すべき

地域の資源の統合に向けて、「(仮称)青函圏北の内海世界遺産構想」などを打ち上げ、総合的に進めて行くべきである

広域的視点で歴史環境を構築し、世界遺産の登録に向けたアプローチを展開すべき。また、その際には、中核施設となる博物館、文書館等の整備は欠かせない

イ / 5市町村の多様な観光資源を発掘し、磨き、つなげるべき

恵山の火山は、東南アジア圏からの誘客上、非常に有効な資源である。「温泉」、「水産」、「火山」をテーマとした資源をつなげるコースを新たに創出すべき

市町村合併による広域資源の活用法について言及すべき

3町1村の自然や縄文資源、海洋水産資源などを、この観光基本計画に位置付け、魅力をつなげるべき

戸井線のアーチ橋脚も北海道の遺産として重要であり、その価値をPRすべき

多様な温泉資源を生かし、たとえば「肝臓に良いルート」など、健康と観光を結びつけた資源を掘り起こしていく作業に着手すべき

広域観光振興のポイントは、個々の広域圏の資源が、函館からわざわざ出かけていく価値があるかということがポイントであり、時間をかけて行っても価値があるという内容的な充実を期すべき

広域観光振興の鍵は体験要素である。海との関わりなどを生かした修学旅行の体験メニューともなるものを立案すべき

ウ / 道南圏広域観光ゾーンを形成すべき

江差、松前を含めた広域圏観光ルートを確立すべき

再掲：広域観光振興のため、景観の良い道路と地域の資源を結びつけていく「シーニック・パイ・ウェイ（道路沿いの地域の景観、歴史、文化、建築など、地域の資源を生かし、景観や地域文化などが楽しめる道路）」の取り組みを導入すべき

広域圏でのアクセスポイントとなる空港や駅での案内体制を確立すべき

道南圏の市町村は、各々いろいろなイベントを開催しているので、函館市のイベントと周辺市町村のイベントとをリンクさせ、広域観光への弾みをつけていくということも策としては必要であり、戦略的な宣伝、広報にも取り組むべき

大沼などには、地元の人間しか知らない隠れたスポットがある。そうした地区の人たちからも広く意見を聞いて、計画に反映すべき

エ / サイベ沢などの縄文遺跡を活用した青函広域観光圏の形成を目指すべき

青森の三内丸山遺跡と南茅部の大船遺跡、函館のサイベ沢遺跡の連携による広域観光拠点整備を図るべき

サイベ沢遺跡については、歴史を何世代も繋いで明らかにしていくためのプロジェクトとなり得る非常におもしろい素材である

「遺跡」については、サイベ沢単体のみならず、南茅部、三内丸山のある北東北との連携を通じて、世界規模で訴えかける素材となる得るものであり、そうした面からも発掘と遺跡整備に取り組むべき

広域観光の振興を期すうえでは、縄文資源の活用についても議論すべき

9. 交通インフラの整備充実を

ア / 観光流動と市民生活を支える交通インフラを整備促進すべき

新幹線のみならず、広域圏交通ネットワークの構築という観点から、港湾整備、道路交通網などについても、その実現に向けた手法などを盛り込むべき

広域圏の交通インフラ整備にあたっては、国際、合併、道南圏という3つの視点で、そこを連結させるものという認識で整備を推進すべき

再掲：観光客増による交通渋滞などは、市民生活にとってはマイナスであり、そうした面からも交通インフラの整備を推進すべき

再掲：広域観光振興のため、景観の良い道路と地域の資源を結びつけていく「シーニック・バイ・ウェイ（道路沿いの地域の景観、歴史、文化、建築など、地域の資源を生かし、景観や地域文化などが楽しめる道路）」の取り組みを導入すべき

10.ITの活用を

ア/（先進性、簡便性、高密度、費用対効果、双方向の高次バランスを追求した）「使える」情報インフラを確立すべき

ITの導入にあたっては、個々の情報のデータベース化を誰が行うのかという視点で検討すべき

尾道の「どこでも博物館（携帯電話にある番号を入力すると、その場所の情報提供はもちろん、旅行後に自分の経験を入力できる）」

などを参考に、旅の記録を双方向で提供しあうシステムを構築すべき

観光情報の詳細なデータベース、いわゆる情報インフラを確立すべき

イ/（既に普及している）携帯端末を活用した情報提供システムを構築すべき

携帯電話を活用した公共交通機関のロケーションシステムを確立すべき

ウ/インターネットによる情報配信を充実すべき

インターネットでの情報収集は、今後ますます増加していくものと考えられることから、各施設、イベントなどのホームページのさらなる充実を奨励すべき

11.コンベンション・イベントの振興を

ア/（経済波及、費用対効果、多用途の高次バランスを追求した）観光都市函館にふさわしいコンベンションホールの建設を検討すべき

大きなコンベンションホールの整備が難しい場合は、数箇所の会議室もしくは展示室などが有機的に活用できるシステムを構築すべき

函館は、他都市開催に比して3割程度参加者が増加するといわれるほど、コンベンションの素地に恵まれているが、会場の確保に非常に苦労している現状を踏まえ、何らかの方策を検討すべき

コンベンション施設については必要。採算性が問われるなか、修学旅行などの小グループでの体験学習など、用途によって会場を仕切ることができるような多目的な施設の整備を検討すべき

全道、全国規模の学会などを開催しようにも、現状ではコンベンションホールやホテルの問題で断念することが多い状況である

コンベンションの経済波及を考えると、その誘致上の鍵となるホールの建設は不可避である。本市のコンベンション需要を把握したうえで、過剰投資とならない適規模のコンベンションホールの建設を検討すべき

コンベンション誘致のためには施設の問題が大きいので、一定の整備をすべき

コンベンションの振興による地域経済の活性化という視点は重要。そのために一定規模のホールが必要となるのであれば、単なる「箱モノ」と一蹴することなく、多目的な用途に活用できる器を十分に検討すべき

イ/コンベンション開催時の人的支援システム確立と、ノウハウの蓄積を図るべき

コンベンション振興にあたっては、運営スタッフが主催者側で確保できない場合もあるので、それらを安心して任せられる組織・団体の充実を期すべき

ウ/既存施設のさらなる有効活用などを通じて、コンベンション開催を促進すべき

大きな会場がなくとも、住民全体が「迎える」心を持てば、一定規模のコンベンションは誘致可能である。人と人との交流を促進するうえからも市民手作りのコンベンション誘致活動を展開すべき

エ/スポーツイベントが開催可能な施設の充実や、市長杯など新規の「冠」イベントを創出すべき

コンベンションの充実を期すため、長期的な視点で、その会場となりえる施設の整備を検討すべであり、コンベンションもスポーツ大会も実施できるような施設の整備を、今後10年というスタンスのなかで視野に入れて検討すべき

全道規模のスポーツ大会が開催できるよう、関連施設の整備をすすめるべき

ハーフマラソンのような全国レベルの大会を開催するため、「市長杯」を創設、振興させていくべきではないか

オ/アフターコンベンションのメニューの充実を図るべき

視察などアフターコンベンションのメニューが新味に欠けるので、さらなる充実を期すべき

さらなる観光振興に向けて、コンベンション、体験型観光など「見る」以外の要素を充実させるべき

カ/国際的なビエンナーレ、トリエンナーレを開催すべき

新たな芸能、工芸、物語、伝説の創出が叶う国際的なビエンナーレ（2年おきに開催されるイベント）、トリエンナーレ（同3年おき）を開催すべき

キ/既存イベントを再編・再構築すべき

夏・冬1回ずつの大きなイベントに対し、限りある資源を集中投下することも検討すべき

再掲：道南圏の市町村は、各々いろいろなイベントを開催しているので、函館市のイベントと周辺市町村のイベントとをリンクさせ、広域観光への弾みをつけていくということも策としては必要であり、戦略的な宣伝、広報にも取り組むべき

5)その他の意見

・観光客の動向を平準的に把握するため、現状では8月に実施しているアンケート調査の実施時期を工夫すべき

・委員会として先進地の視察を行うべき

・駅前にあった問屋街が消えたのは流通センターの建設による影響が大きい。そういったことを繰り返さないようにするためにも、計画的なまちづくりを行うべき

・明治期において諸外国の文化が一挙に流入した函館は、当時、凄まじいほどのパワーでそれらを咀嚼し、函館独自といわれる異国情緒あふれる町並みを創り上げた。転じて今日の函館には、そうしたパワーが希薄である。単に古い町並みを「保全」していくことにとどまらず、新たな文化を市民一丸となって「創造」していくことも必要となっているのではないかと

・函館はまちの機能が分散されているので、「中心地をどこに置くのか」といった都市計画上の論議が必要ではないかと

・函館は、夜間あそべる場所が少ないので、まつり期間中だけでも夜通しで遊べるような環境があっても良いのではないかと

素案策定に向けた意見

【別紙】

1 中間報告書の内容について

函館観光の現状と課題、計画の基本理念、基本方針等を記述した中間報告書については、本策定検討委員会の「中間報告策定に向けた意見書（平成15年12月2日付けで函館市長あて提出）」の内容をよく反映しており、妥当であるとの認識に至りました。

2 素案に盛り込むべき施策について

施策の設定にあたっては、本計画の基本理念である「観光文化のあるまち・函館」の実現に向けて、別記を参照のうえ、「中間報告策定に向けた意見書」において提案した各事項が、具体的な施策として盛り込まれることを強く望みます。

なお、観光基本計画の実効的な推進を図るうえでは、計画の進捗状況の検証や時代の変化に柔軟に対応した施策展開こそが重要との認識から、素案には、市民・観光関連団体・行政が協働し、計画を検証・推進していく新たな組織の設置について、確実に新規施策として位置付けがなされるよう切望いたします。

平成16年 3月10日

函館市長 井上 博司 様

函館市観光基本計画策定検討委員会
委員長 番 匠 勲

函館市観光基本計画の素案策定に向けた意見について

当委員会では、函館市観光基本計画（中間報告）の公表後、専門部会（観光の「魅力開発」部会および観光で「まちづくり」部会）と全体会議において、中間報告書の内容および素案に盛り込むべき施策について討議を進めてまいりましたが、このたび、別紙のとおり意見をとりまとめましたので、報告いたします。

■会議開催状況

平成15年 8月29日	第1回全体会議開催
平成15年 9月 9日	第1回魅力部会開催
平成15年 9月10日	第1回まちづくり部会開催
平成15年 9月24日	第2回魅力部会開催
平成15年 9月25日	第2回まちづくり部会開催
平成15年10月 7日	第2回全体会議開催
平成15年11月20～28日	第3回魅力部会開催（持ち帰り部会）
平成15年11月20～28日	第3回まちづくり部会開催（持ち帰り部会）
平成15年12月 2日	第3回全体会議開催
平成16年 2月 4日	第4回魅力部会開催部会開催
平成16年 2月 5日	第4回まちづくり部会開催
平成16年 2月25日	第5回魅力部会開催
平成16年2月26～3月5日	第5回まちづくり部会開催（持ち帰り部会）
平成16年 3月10日	第4回全体会議開催

【別記】

計画の基本理念『「観光文化」のあるまち・函館（住むこと、訪れたことが「自慢」できるまちづくり）』の実現と、5つの基本方針の具現化に向けて、今後推進すべき観光振興施策を、以下のとおり体系的に整理し、設定すべきと考えます。

自由の「観光文化都市」づくり（全ての人に自由な活動の機会を提供できるまちづくり）

- ・全ての人にやさしい観光都市の実現（バリアフリーとユニバーサルデザインの追求、国際化対応の充実）
- ・情報ネットワークの整備・充実（観光案内機能の整備・充実、観光情報提供ツールの開発、充実、観光情報提供体制の整備）
- ・交通ネットワークの整備・充実（観光流動と市民生活を支える交通インフラの整備促進、市内交通環境の充実）

自主の「観光文化都市」づくり（自らがまちの魅力を発見・発掘し、語れるまちづくり）

- ・市民との協働による観光地づくり（観光資源・施設の魅力を再構築、市民と観光客が楽しめる観光メニューの創出）
- ・滞在型・体験型観光の振興（滞在促進のための環境整備、地域資源を生かした体験型観光の振興）
- ・広域観光の推進（青函・道南圏広域観光圏の形成、市町村合併を見据えた「市内」観光の振興）

自立の「観光文化都市」づくり（常に観光振興を意識し、経済的な自立を目指すまちづくり）

- ・函館ブランドの確立・発信（函館ブランドの確立と商品の開発、観光関連産業の活性化、プロモーション活動の充実）
- ・コンベンション・イベントによる振興（コンベンション機能の充実、イベントの創出と展開）

自律の「観光文化都市」づくり（まちの「負」に気づき、「正」へと転換・発展していくまちづくり）

- ・自律を促すシステムの確立（評価・検証・推進体制の確立）
- ・安全な観光地づくり（「安全」、「安心」を担保するシステムの創出）

自発の「観光文化都市」づくり（ずっと住んでいたい・また行きたいと思えるまちづくり）

- ・美しいまちの創造（生活空間の美化、観光都市としての「雰囲気」の醸成）
- ・ホスピタリティとサービスの向上（ホスピタリティの向上、サービスの向上、函館観光エキスパートの創出）

素案に関する意見

【別記】

- ・今後のさらなる観光振興に向けた第一義的な取り組みは、本計画の市民への周知徹底である。このため本計画の概要等について、考えうる最大限の努力をもって、多様な手法で発信すべきである。
- ・本計画の着実な推進に向けては、市民・企業・行政の協働による全市をあげた取り組みが不可欠である。このため本計画において位置づけた「(仮称)函館市観光アドバイザー会議の設置」については、最優先で取り組むべき施策となることから、計画初年度の平成16年度内において、かかる組織化を確実に行うべきである。



素案に関する意見書の受領状況写真

平成16年6月30日

函館市長 井上 博司 様

函館市観光基本計画策定検討委員会
委員長 番 匠 兼

函館市観光基本計画(素案)に関する意見について

平成16年5月に公表された函館市観光基本計画(素案)について、当策定検討委員会において討議した結果、この内容は概ね妥当であるとの結論に達しましたので、ここに報告します。
なお、今後の成案策定と計画の推進に関し、別記のとおり要望事項を列記します。

■会議開催状況

平成15年 8月29日	第1回全体会議開催
平成15年 9月 9日	第1回魅力部会開催
平成15年 9月10日	第1回まちづくり部会開催
平成15年 9月24日	第2回魅力部会開催
平成15年 9月25日	第2回まちづくり部会開催
平成15年10月 7日	第2回全体会議開催
平成15年11月20~28日	第3回魅力部会開催(持ち寄り部会)
平成15年11月20~28日	第3回まちづくり部会開催(持ち寄り部会)
平成15年12月 2日	第3回全体会議開催
平成16年 2月 4日	第4回魅力部会開催
平成16年 2月 5日	第4回まちづくり部会開催
平成16年 2月25日	第5回魅力部会開催
平成16年2月26~3月5日	第5回まちづくり部会開催(持ち寄り部会)
平成16年 3月10日	第4回全体会議開催
平成16年 6月30日	第5回全体会議開催